



園だより

7月号

新宿区立西戸山幼稚園 令和7年6月30日発行

ビオトープをつくる

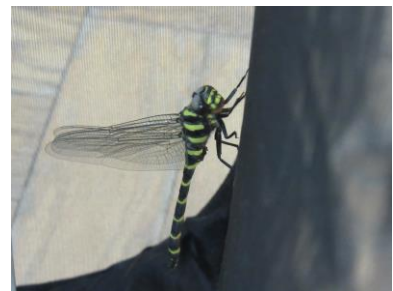
—多様性と循環—

園長 佐藤 淳穂

大事に育てていたオニヤンマのヤゴが羽化し、立派なトンボになりました。園児が祖母宅の近くで捕まえてきたヤゴが冬を越せずにかっかりしていたところ、知り合いの専門家が1匹、分けてくれたヤゴでした。ヤゴは生きている水中生物しか食べないので苦労しましたが、保護者の方の協力と多大なる関心に支えられて今日に至りました。

オニヤンマは5年間もヤゴで生活する日本最大のトンボで、10センチくらいあります。年長組を中心に子どもたちは美しいオニヤンマに夢中になりました。

アゲハチョウならば庭に放すところですが、オニヤンマは簡単にはいきません。新宿には生息していないので、生態系を壊してしまうというのです。さあ、どうする？ 子どもたちも保育者も頭を抱えました。



「えさを入れなきゃ」まずは誰もがそう思いました。オニヤンマは肉食で、飛行しながら獲物を捕まえるそうです。とりあえず、園庭を飛んでいたシジミチョウを捕まえました。「食べたかな…」ケースの中を覗くと、シジミチョウはオニヤンマの長いお腹につかまって仲良くしていました。次の日はAちゃんが畑で「名前はわからない飛ぶ虫」を捕まえてきました。一週間が経ち、オニヤンマの小屋にはテントウムシやバッタ、アメンボにクモも入っていました。しかし、まだオニヤンマが食事をしているところを見た人はいません。クモの糸にバッタが絡まっている始末でした。

毎日の悩みや問いを追究しようと、ヤゴを提供してくれた専門家（つくば市の国立環境研究所の研究員）とビデオ電話をつなぐことになりました。子どもたちは「図鑑のように目が緑色じゃないのはなぜか」「何を食べるのか」「どこに放せばいいのか」と次々に質問をしました。そして、生き物は生まれたところに返すことが大切だとわかりました。

翌々日の朝、オニヤンマは動かなくなっていました。「どうして？」「クモの糸に絡まったんじゃない？」「クモを入れなければよかった…」「なかにし先生（専門家）に聞こうよ」…大空を飛びたかっただろうにと申し訳ない気持ちになっているその時、Bちゃんが「トンボがいる！」と園庭から駆け込んできました。園庭の池で今年5匹目のシオカラトンボが羽化していました。

Cちゃんはオニヤンマの人形を作りました。Dちゃんはヤゴも作りました。年長組には「トンボ研究所」ができていろいろな虫を図鑑で調べて絵を描いています。命の循環と生態系について考えつつ、今月はいよいよ池の改造に取り掛かります。